

〈論 文〉

複文におけるテモラウの意味  
—テ形節複文主節述語の場合—

呉 丹<sup>†</sup> (東京外国語大学博士後期課程)

The Meaning of “V-te-morau” in Compound Sentences:  
The Case of “V-te-morau” as a Main Clause Predicate in “V-te” Clause Compound Sentences

Dan Wu (Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Course)

**キーワード:** テモラウ、テ形節複文、意味、使役、受身

**Key words:** “V-te-morau”, “V-te” clause compound sentences, meaning, causative, passive

**要旨:** 本稿では、テモラウがテ形節に後続する主節述語となる複文「V-テ、V-テモラウ」におけるテモラウの意味を、類似の構造をとる使役の複文「V-テ、V-(サ)セル」と受身の複文「V-テ、V-(ラ)レル」とを比較して、考察した。これまで考慮されなかった文のとり構造、つまり複文において、主節述語となるか従属節述語となるかに注目し、テモラウは、主節述語となるこのような構造の複文において、使役に近い意味を表すことを論じた。

**Abstract:** This paper analyzes the meaning of “V-te-morau” as a main clause predicate in the “V-te, V-te-morau” construction in comparison with the similar “V-te, V-(sa)seru”, “V-te, V-(ra)reru” constructions. Earlier research has not considered the construction depending on whether the verb is used as a main or subordinate clause predicate. This paper argues that the meaning of “V-te-morau” approaches the causative sense when used as a main clause predicate.

原稿受理日 (2019-10-01)

査読後掲載決定日 (2020-01-09)

日本研究教育年報. 2020, Vol. 24, pp. 37-55. ISSN 2433-8923



<sup>†</sup> 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 1. はじめに

テモラウ文は、主語が動作主体の動作から恩恵を受け取るという意味を表すときにしばしば用いられる文であり、そこにはテモラウ文の必然性や独自性がある。一方、ヴォイスの観点から見ると、テモラウ文は主語が動作主体でない文である点で使役文・受身文と等しく、それに支えられて意味的にも類似性が発揮されて、次の(1)(2)のように、使役に近い意味を表す場合もあれば、受身に近い意味を表す場合もある。

(1) 太郎は花子にご飯を作ってもらった<sup>1</sup> {≡ご飯を作らせた}。

(2) 太郎は先生にほめてもらった {≡ほめられた}。

(1) のテモラウ文は「太郎」が「花子」に何らかの働きかけをして、「ご飯を作る」という事態が実現したということを表す。これは使役文に非常に近い意味であると言える。つまり、(1) の文を使役文「太郎は花子にご飯を作らせた」と言い換えても若干ニュアンスは異なるものの両者は同一事態を表すと言えよう。一方、(2) のテモラウ文は、主語の「太郎」から動作主体である「先生」への働きかけはなく、「先生」が自ら「太郎をほめる」という動作を行い、その影響を「太郎」が受けるという、受身文に近い意味を表している。このことは、(2) が「太郎は先生にほめられた」という受身文に言い換えても両者の事態的意味が同じであることから分かる。このように、テモラウ文は使役に近い意味を表す場合もあれば受身に近い意味を表す場合もある。このことはすでに多くの研究で指摘があり、さらに文同士の言い換え可能な条件についても多くの研究がある。しかし、先行研究では文中の要素(動詞の種類や名詞の性質等)にのみ着目しており、単文・複文という構造面に対する考慮がなかった。

しかし、次の(3)(4)のように、テモラウの用いられる位置が、複文の主節述語か従属節述語かで意味が異なる場合がある。

(3) 太郎は花子に頼んで、ご飯を作ってもらった {≡ご飯を作らせた}。

(4) そう言ってもらうと {≡言われると} 助かる。

(3) はテモラウがテ形節に後続する主節の述語となる例であり、(4) はテモラウが条件節中の述語となる例である。(3) では、従属節中の「頼んで」という語の存在から分かるように、「太郎」が「花子」に働きかけを行っており、この場合のテモラウは使役の意味に近くなる。それに対し、(4) では、主語(ここでは話し手)が動作主体(ここでは聞き手)に働きかけることなく、動作主体が自ら「言う」という行為を行い、それによって話し手が影響を受けるということを表す。そして、主節には主語にとってありがたい状態(「助かる」)が表現され、テモラウを述語とする従属節はその状態の原因となる事柄が表現されている。このようなテモラウは受身の意味に近くなると言える。

以上で述べたように、テモラウの意味は、複文の主節の述語として用いられるときと、複文の従属節の述語として用いられるときとは異なる場合がある。このような特徴に着目

<sup>1</sup> 本稿では、主節の事態を一重下線、従属節の事態を波線で示すこととする。

し、本稿ではテモラウがテ形節に後続する主節の述語となる「V-テ、V-テモラウ」文（以下「テモラウの複文」と呼ぶ時もある）を取り上げ、V-テモラウの意味を考察する。その際に、①従属節と主節の関係（＜時間的前後＞の関係か、＜原因—結果＞の関係か、＜付帯状態—主たる状態＞の関係か<sup>2)</sup>）、②「原因—結果」の関係の本質（＜働きかけ—意志動作の実現＞か、＜受動的なこと—意志動作の実現＞か）、③従属節の動詞の種類（意志動詞か、無意志動詞か）という3つの観点から、意味的に類似している使役の複文「V-テ、V-（サ）セル」（「太郎は花子に頼んでご飯を作らせた」）と受身の複文「V-テ、V-（ラ）レル」（「太郎は部屋を汚して母親に叱られた」）とを比較して、「V-テ、V-テモラウ」複文におけるテモラウの意味を明らかにする。これは、複文に現れるテモラウの意味を明らかにしようとする試みの一部である。

## 2. 先行研究

テモラウが使役に近い意味を表す場合もあれば、受身に近い意味を表す場合もあるということは、これまで奥津・徐（1982）、寺村（1982）、仁田（1991）、益岡（2001）、山田（2004）などの多くの研究での指摘があり、研究者の間ではすでに共通認識となっているとも言える。例えば仁田（1991）では「依頼受益型」と「非依頼非受益型」の2つに分類しており、益岡（2001）では「受動型てもらう」と「使役型てもらう」、山田（2004）では「依頼的テモラウ受益文」、「許容的テモラウ受益文」、「単純受影的テモラウ受益文」というように分類がなされている。また、李（2014）ではテモラウ文と使役文の意味解釈の共通点と相違点を考察し、そしてさらに、李（2015）では「関与（Inclusion）」と「排除（Exclusion）」の概念を用いてテモラウ文と受身文の意味的關係についての考察を行っている。しかしこれらの研究はいずれもテモラウが使われる環境、つまり文のタイプが単文であるか複文であるかを区別せずに論じており、また主に単文の構造をとる文を対象として考察を行っているものが多い。前節で述べたようにテモラウが使役の意味に近くなるのか、あるいは受身の意味に近くなるのかは、複文の構造において主節の述語となるかそれとも従属節の述語となるかによって大きく変わる場合があるため、単文だけに着目して考察するだけでなく、複文にまで視野を広げ、テモラウの意味について考察を行う必要がある。

一方、使役文には「母親は子供に頼んで買い物に行かせた」のような、複文のテモラウ文と似た構造をとる文があるが、早津（2015）ではこのような構文を対象にし、従属節の動詞の語彙・文法的な性質に注目して、従属節の事態と使役文の意味との関係について考察している。また、早津（同）では、従属節の事態を「A 動作の要求・誘導」「B 動作を行う立場

<sup>2)</sup> テ形接続の意味・用法については、様々な呼びかたがあるが、その意味・用法に【付帯状態】【時間的継起・起因的継起】【並列】の3種4類がある点で共通していると言える。本稿では仁田（1995）の上記の3種4類の分類法に従うこととする。なお、本稿の考察対象であるテ形節に後続する主節の述語に付加される「V-テ、V-テモラウ」では、【付帯状態】【時間的継起・起因的継起】の2種3類のテ形接続の意味・用法が観察された。

や環境のつくりだし」「C 意識の誘導」「D 身体部位への関わり」「E 動作主体に向かうのではない種々の動きや状態」というように 5 つに分類し、従属節の事態と主節の意味との関係について、従属節の事態が A、B、C の場合には主節使役文の意味が「Ⅰ意志動作の引きおこし」となり、従属節の事態が D の場合には主節使役文の意味が「Ⅱ身体運動の引きおこし」と「Ⅲ生理変化の引きおこし」となり、従属節の事態が E の場合には主節使役文の意味が「Ⅳ心理変化の引きおこし」となると指摘している<sup>3</sup>。

1 節で述べたように、テモラウ文・使役文・受身文には、「V-テ、V-テモラウ/V-（サ）セル/V-（ラ）レル」のような、構造的にも意味的にも類似する構文があるため、本稿では、早津（同）を参考にし、「V-テ、V-テモラウ」複文と「V-テ、V-（ラ）レル」複文とを考察し、これに加えて早津（同）で指摘されている使役の複文とを比較して、「V-テ、V-テモラウ」複文におけるテモラウの意味を明らかにする。その際に、早津（同）にならって、従属節の事態と主節の事態との関係に注目して考察を行う。

### 3. 考察対象と方法

本稿では、テ形従属節複文「V-テ、V-テモラウ」（「太郎は花子に頼んでご飯を作ってもらった」）と、それと構造的に類似している受身の複文「V-テ、V-（ラ）レル」（「太郎は部屋を汚して母親に叱られた」）を考察対象とし、実例に基づき実証的に考察する。本稿で用いる用例については、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から検索アプリケーション中納言を利用し、ジャンルが「文学」<sup>4</sup>であるものを検索対象として収集した。結果として、テモラウ文は全部で 4846 例あり、その中から手作業で「V-テ、V-テモラウ」構造の複文を抽出すると、263 例あり、これを本稿の考察に用いることとした。これは、「乗員の手を借りて、強引に引っ張りだしてもらった」のような慣用的な表現や、「頼りきって心のボールを打って、ずっと相手してもらいたい」のような比喩的な表現を除いている。また、V-（ラ）レルを含む文は全部で 26656 例<sup>5</sup>あり、これについても手作業で「V-テ、V-（ラ）

<sup>3</sup> 早津（2015）では、各類の従属節の事態と主節の事態との関係について、次のような例が挙げられている。

A-Ⅰ「部長が秘書に命じて コピーをとらせる」

B-Ⅰ「アルバイトをやとって 荷物を運ばせる」

C-Ⅰ「子供をおだてて 食器を洗わせる」

D-Ⅱ「子供の手をひいて 歩かせる」

D-Ⅲ「後輩をなぐって けがをさせる」

E-Ⅳ「太郎が突然大学をやめて みなを驚かせる」 (p.10)

<sup>4</sup> 使役の複文（「V-シテ、V-（サ）セル」）の性質に関して、本稿で参考にした早津（2015）は文学作品から収集した例を考察対象としているため、本稿でテモラウの複文と受身の複文について、ジャンル別の差を避けるために、同じように文学作品に限定して考察した。なお、外国語の影響を避けるために翻訳作品を除外した。

<sup>5</sup> 検索条件式：前方共起：キーから 10 語以内 語彙素が て

AND 品詞の中分類が 助詞・接続助詞

キー：語彙素が れる（／られる）

なお、この検索条件式で抽出された 26656 例のうちには重複する例や、いわゆる「可能」「尊敬」「自発」の意味を表す例が含まれている。

レル」構造の複文のみを抽出し、慣用的な表現や比喩的な表現を除いた 284 例を本稿の考察に用いた。

ここで本稿における術語の定義についてことわっておく。「V-テ、V-テモラウ」と「V-テ、V-（サ）セル」、「V-テ、V-（ラ）レル」はそれぞれ異なる構文であるが、主節で二格項が指し示す人の動作の実現が述べられるという点では共通している。例えば、テモラウの複文「太郎は花子に頼んで（花子に）ご飯を作ってもらった」の主節では、二格項「花子」の意志動作「ご飯を作る」の実現が述べられ、使役の複文「母親は子供に頼んで（子供に）買い物に行かせた」の主節では、二格項「子供」の意志動作「買い物に行く」の実現が述べられ、受身の複文「太郎は部屋を汚して母親に叱られた」の主節では、二格項の「母親」の意志動作「叱る」の実現が述べられている。このように、主節で二格項の動作が実現されることについてはすでに使役の複文の場合に早津（同）では、「動作のひきおこし」と呼ばれているが、3種の複文の共通性に着目して、本稿では、これら3種の複文の主節事態について、いずれも「動作の実現」と呼ぶこととする。

以下では、第4節で、「V-テ、V-テモラウ」複文の性質を、従属節の事態と主節の事態との関係に注目して考察し、それに基づいて、①従属節と主節との関係、②広義の＜原因—結果＞の関係の本質、③従属節の動詞の種類という3つの観点から、「V-テ、V-テモラウ」複文と「V-テ、V-（サ）セル」複文とを比較する。第5節で、「V-テ、V-（ラ）レル」複文の性質を考察し、さらに第6節では、第4節と第5節で明らかになった内容に基づいて、「V-テ、V-テモラウ」複文を中心として、「V-テ、V-（サ）セル」複文と「V-テ、V-（ラ）レル」複文とを比較する。

#### 4. 「V-テ、V-テモラウ」複文の性質

本節では、従属節の事態と主節の事態との関係に注目して考察を行う。具体的には、4.1節でテモラウの複文の従属節と主節との関係について考察し、4.2節でテモラウの複文と使役の複文との異同について考察することとする。

「V-テ、V-テモラウ」構造をとる複文は、従属節で主語の動作主体への具体的な働きかけや種々の動きなどについて述べ、主節で人の意志動作の実現や心理変化の実現、生理変化の実現などについて述べる。以下では実例を用いて、具体的に考察を行う。

##### 4.1 「V-テ、V-テモラウ」複文の従属節事態と主節事態との関係

本節では早津（2015）で指摘されている使役の複文における従属節事態の分類を参考にし、テモラウの複文の従属節事態と主節事態のありかたについて確認する。早津（同）では、使役の複文の従属節事態について「A 動作の要求・誘導」「B 動作を行う立場や環境のつくりだし」「C 意識の誘導」「D 身体部位への関わり」「E 動作主体に向かうのではない種々の動きや状態」があると指摘している。そこで本稿でも同じようにテモラウの複文の従属節の実例を分析した結果、この従属節にも似たようなタイプが観察された。これらについて、働

きかけが動作主体に向かうか否かという点でまとめると、(A 類) ～ (D 類) は従属節で動作主に向かう種々の働きかけについて述べられるものであり、(E 類) は従属節で動作主に向かうのではない種々の動きや状態について述べられるものである。また、主節の事態については、本研究で考察したテモラウの複文においては、動作主体の意志動作の実現を述べる文が圧倒的に多く (263 用例中 261 例)、動作主体の生理変化の実現、並びに動作主体の心理変化の実現を述べる文は、それぞれ 1 例のみに留まった。

(A) 【動作の要求・誘導】

本稿で調査したテモラウの複文では、早津 (同) で指摘されている【動作の要求・誘導】と同様の動詞の種類が観察された。ここでは早津 (同) にならって、【動作の要求・誘導】と呼ぶこととする。また、この (A 類) は、用例数の面から見ると最も多く、全用例 263 例の約 5 割を占めている。

(a-1) 言語活動による動作要求的な活動

〈(人ニ) 頼んで、ねだって、お願いして、お頼み申して、せがんで、乞うて、すがって、依頼して、命じて、すすめて、申し出て、言って、無理言って、説いて、連絡して〉<sup>6</sup>

この類は、従属節で動詞が二格の人名詞とくみあわさって動作の実行を要求することを意味し、主節で動作主体の意志動作の実現について述べられている。そして、このような「動作の要求」は、言語活動を表す動詞を用いることで表現される場合が多い。例えば、次の (5) では、従属節において動作の要求「パブロに命じて」とあり、主節で「パブロ」の意志動作である「服を焼く」の実現が述べられている。(6) では、従属節で動作を要求することを意味する「依頼して」とあり、主節で動作主体の意志動作である「モーターボートを探す」という事態の実現が述べられている。

(5) (服を) ここに残していったら、パブロに命じて焼いてもらうことになる。(悪夢の終わりに)

(6) 早苗の証言を重視した石川県警は、翌日、海上保安庁に依頼して、日本海側で問題のモーターボートを探してもらうことにした。(裏切りの特急サンダーバード)

これらの「動作の要求」を表す従属節の事態は使役の複文の場合と同じく、従属節で働きかけが表され、主節のテモラウの意味は使役の意味に近くなる。しかし、テモラウ文全体に現れる恩恵という意味の影響で、テモラウの複文の従属節の動詞は、使役の場合に比べると

<sup>6</sup> 早津 (同) では「言語による動作要求的な活動」のグループの動詞について、形式的に、次のような 2 つの構文的形式をとることができるとしている。一つは、【人ニ ～ V<sub>1</sub>シロト/シナサイト/スルナト/スルヨウ/... V<sub>2</sub>】(「部下に調査するよう命じる」) のような、要求する相手が二格名詞で表され、要求する動詞 (V<sub>1</sub>) が命令形などモーダルな形の動詞をとる引用節中に表される構造である (早津 2015:4)。もう一つは、【人ニ N [事 (動作)] ヲ V】(「部下に調査を命じる」) のような、要求する相手は同じく二格名詞で表され、要求する動作は動作性名詞のヲ格で表される構造である。

強い命令のニュアンスを帯びる動詞が少なく、依頼や懇願を表す動詞（「頼んで、ねだって、お願いして、乞うて」など）が多くみられるという傾向がある。それに対し、使役の複文の従属節中の動詞は、早津（同）で挙げられているように、「命じて、命令して、指図して、いいつけて、強要して、強いて、言い聞かせて」など、強い命令のニュアンスを帯びるという点で、テモラウの複文の従属節に現れる動詞の傾向とは異なっている。

（a-2）動作誘導的な態度

〈（人ヲ）説き伏せて、説得して〉

この「動作誘導的な態度」を表す動詞<sup>7</sup>は、テモラウの複文の中にも見られるが、数が非常に少なく、その数は2例のみである。これらの動詞はヲ格の名詞とくみあわさって、その名詞の示す人に動作を行うように誘導することを表す。この類の複文でも従属節で主語から動作主体への働きかけが表され、主節で動作主体の意志動作の実現が表されている。

（7）永吉は源治を説き伏せて長男の名づけ親になってもらった。（あかね空）

（8）午前中、藤沢市役所を説得して、国道一号線の閉鎖地点から先を、むこうの警察の車に誘導してもらう話をつけておいた…（首都消失）

（B 類）【動作を行う立場や環境のつくりだし】

この（B 類）の従属節では、主節で表される動作を実行するために動作主体にその動作を行う立場や環境を作ることについて述べている。この類の用例数は全体の約 1 割を占めている。使役の複文の従属節における事態は、（b-1）「社会的立場や役割のつくりだし」、（b-2）「到着点での動作を見こした移動」、（b-3）「特定の社会環境への移行」の 3 種類がある（早津 2015：6）とされるが、テモラウの複文の従属節では（b-1）と（b-2）の 2 種類のみが観察され、（b-3）は観察されなかった。

（b-1）社会的立場や役割のつくりだし

〈（人ヲ）雇って、通じて、介して、（重役を）動かして〉

この類は、従属節中の動詞が社会的役割を表すヲ格名詞とくみあわさり、そのヲ格名詞が、主節中で、自身の社会的役割が発揮される動作を実現することについて述べられる。例えば（9）では、従属節で動詞「雇う」が社会的役割を表す名詞「殺し屋」とくみあわさって、社会的立場や役割のつくりだしを表し、主節で動作主体の役割が発揮される動作「殺す」が実現するということが表されている。

（9）殺し屋を雇って自分を殺してもらうしかなさそうだな。（野望戦略）

<sup>7</sup> 「動作誘導的な態度」のグループの動詞は、注 6 で挙げた【人ニ ～ V<sub>1</sub> シロト/シナサイト/スルナト/スルヨウ/… V<sub>2</sub>】の形式をとることができるが、【人ニ N〔事（動作）〕ヲ V】の形式をとることはできない（早津 2015:5）。

(b-2) 到着点での動作を見こした移動

〈(人ヲ場所ニ) 招いて、呼んで、追放して、誘い出して〉

この類の文では、従属節中のヲ格の人名詞とニ格の場所名詞とがくみあわさって、人をある社会的環境・到着点へ移動させるという意味が表され、主節において、到着点で意志動作が実現することが表されている。

(10) 当初私が立てた計画では、代々風元家に往診に通ってくれている医者呼んで手当てをしてもらうつもりだった。(逃げ歌)

なお、使役の複文の場合は、従属節動詞の種類が上記の (b1) (b2) 以外に、(b3) 「特定の社会環境への移行」〔人ヲ組織ニ〕入れて、あずけて、加えて等) の例があると指摘されている。「娘をナイロビの飛行機クラブに入れ、パイロットの免許を取らせた」(早津 2015: 7) のように、(b3) の動詞はヲ格の人名詞とニ格の組織名詞とがくみあわさっているものである。「V-テ、V-テモラウ」の複文にも、「子供をピアノ教室に入れて、ピアノの練習をもらった」というように、同様の例が存在してもなんらおかしくはないが、今回考察した用例の中には見当たらなかった。

(C 類) 【間接的な誘導】

(C 類) は、従属節では動作主体への誘導について述べられており、主節では動作主体の意志動作の実現について述べられるというタイプである。用例数の面から見ると、この (C 類) は全体の約 3 割を占めている。早津 (同) では、使役の複文の従属節において動作主体への意識的な誘導を表す動詞として「(人ヲ) あざむいて、だまして、ごまかして、おびやかして、慰労して、いじめて、なだめすかして、買収して」があげられている。テモラウの複文にはこの種の動詞は観察されなかったが、間接的に意識的な誘導を表していると考えられる名詞と動詞とのくみあわせがいくつか観察された。

(11) 力仕事はほとんど近所に住む若いひとにお金を払ってやってもらった、と母がゆうべ言っていた。(リビング)

これらの例は、ニ格の人名詞とヲ格の物名詞或いは事名詞とがくみあわさって、具体的な動作を表す例がほとんどであり、これらの具体的な動作は、使役の複文で観察される意識の誘導を表す動作の具体的手段と見られるものがある。例えば、テモラウの複文で間接的な誘導を表す名詞と動詞とのくみあわせに「金を費やして、寿司を奢って」などが観察されているが、これらは使役の複文に挙げられている、例えば「買収して」などの具体的手段と見ることができる。この類の複文の従属節では働きかけの意味を読み取ることができ、主節で動作主体の意志動作の実現が表される。主節のテモラウは使役の意味に近くなる。

これらの動詞を語彙的な意味と構文的特徴に基づいて分類すると、以下の 4 つのタイプになる。



(ア) 【{人} ニ {物} ヲ V (授与<sup>8</sup>)】

〈(人ニ物ヲ) やって、奢って、(虎の子の現金を) 支払って、(多額の費用を) 払って、〉

この《授与》類では、従属節で動詞・二格の人名詞・ヲ格の物名詞のくみあわせによって間接的な誘導が表され、主節で動作主体の意志動作の実現が表される。《授与》類におけるヲ格名詞のほとんどが金銭関係の物名詞である点の特徴的であると言えよう。金銭などの授与を通して、相手を買収したりすることで間接的に働きかけ、動作の実現へ誘導するということが従属節で述べられているのである。上記でも取り上げたが、この《授与》類の事態内容は早津 (2015) で指摘されている意識誘導動詞「買収して」などの具体的手段と見ることができる。

(12) だけど私は律子に寿司を奢って、話を聞いてもらっているのだ。(ワルツ)

(イ) 【{人} ニ {事} ヲ V (伝達)】

〈(人ニ事ヲ) 紹介して、教えて、問い合わせ、説明して、話して〉

従属節では《伝達》を表す動詞・二格の人名詞・ヲ格の事名詞のくみあわせで言語活動による間接的な誘導が表される。そして主節で動作主体の意志動作の実現が見てとれる。この種の従属節における事態内容も、使役複文の述語になる意識誘導動詞の具体的手段と見ることができる。

(13) 病院の職員にキャッシュカードの暗証番号を教えてお金を引き出してもらおうと思っただが、(精神病棟の中で)

(ウ) 【{人} ニ V (対向的態度)】

〈(人ニ) 食らいついて、頼って、謝って、懺悔して、(泣きを) 入れて、あつて〉

上記の動詞と二格の人名詞のくみあわせは、相手にある種の態度を示すことで、動作主体に間接的に働きかけ、動作主体の意識を誘導するということが述べられる。

(14) その辺のことをのみこんで君たちは尾形さんに食らいついて、いろいろな人を紹介してもらい… (熊野路伝説殺人事件)

(エ) 【{場所} ニ V (移動)】

〈(場所ニ) 行って、寄って、訪ねて、入って、飛び込んで〉

このような文では、従属節内で移動動詞と二格の場所名詞がくみあわさり、社会的役割のある場所への移動を表し、その場所にいる人の社会的役割を利用することで間接的に働き

---

<sup>8</sup> これらの間接的な誘導を表す動詞の分類は早津 (2008) を参考にしたものである。早津 (同) は、人名詞に限定して、人名詞と動詞とのくみあわせを対象に、連語のタイプとその体系をさぐるものである。本稿ではテモラウ文の主語も動作主体 (二格項) も人名詞の文に限定して考察しているため、動詞特に従属節に用いられる名詞と動詞とのくみあわせについては、早津 (同) から学ぶところが多い。

かけることを述べている。また、主節ではその場所にいる人の意志動作の実現を述べている。

(15) 靴屋に寄って、踵を新しい物にかえてもらった。(ダンス・ダンス・ダンス)

他に、《提示》を表す動詞「見せて」が二格の人名詞・ヲ格の事名詞とくみあわさる例や、《交渉》を表す動詞「交渉して」がト格の人名詞とくみあわさる例、《動作表明》を表す動詞「(連絡することを) 約して」が二格の人名詞とくみあわさる例も見られるが、いずれも 1 例のみである。数は少ないが、これらの動詞が用いられる従属節でも働きかけが読み取れる。

#### (D 類) 【身体への関わり】

〈(鎮静剤を) 打って、(遺骨を) 納めて〉

この類は、従属節で動作主体の身体への接触や把持などの関わりが述べられ、主節で動作主体の生理変化などの実現が述べられている。今回収集した用例のなかで、従属節中において身体への関わりが述べられる例は 2 例のみである。これは主節で動作主体の生理変化・心理変化の実現が述べられている。この複文の主節のテモラウも使役に近い意味を表している。

(16) 鮎子さんが、興奮状態なので、鎮静剤を打って、少し眠ってもらった方がいいと思  
い、(京都・金沢殺人事件)

#### (E 類) 動作主体に向かうのではない種々の動きや状態

上記、(A 類) ～ (D 類) の複文は、いずれも従属節中では、働きかけが動作主体に向かうということが述べられているが、(E 類) の複文は、従属節中で動作主体に向かわない種々の動きや状態について述べられている。そしてこの類の複文の主節はいずれも動作主体の意志動作の実現について述べられるものであり、使役の複文で見られる、従属節の事態が「動作主体に向かうのではない種々の動きや状態」であるときに主節の内容が「心理変化のひきおこし」となる、という性質と異なる。この (E 類) の用例数は、全体の約 1 割を占めている。

(17) 紗南ちゃんちのお母さん、いつも逃げ回って、(締め切りを) 延ばしてもらって  
るじゃない？ (こどものおもちゃ)

(18) あ、もちろん、『花咲く乙女』の評判を落とさないように、肝心なところはぼかし  
て、うまく協力してもらいますから。(プロジェクト花咲く乙女)

(19) 「違いますよ。そんないやな話がしたくて集ってもらったんじゃない」(戦時下動物  
活用法)

(17) の従属節では、自動詞が用いられ、主語(「紗南ちゃんちのお母さん」)自身の動作が「逃げ回って」となっており、動作主に向かう動作ではない。(18) の従属節では、他動詞が用いられているが、動作対象は人ではなく、「肝心なところ」である。(19) は従属節中で接辞「たい」のテ形が用いられている例である。これらの例はいずれも動作主体への働き

かけが従属節内からは読み取りにくい。それでも、文脈から主節のテモラウは使役の意味に近づいていることが分かる。

この（E 類）の従属節で観察される事態は、自動詞で表されるもの、物が対象である他動詞で表されるもの、また形容詞で表されるものであり、一般化するのは難しい。従属節中の述語用言の種類が多岐にわたり、一般化が難しいという点は、使役の複文の場合と類似している<sup>9</sup>。以下でテモラウの複文で観察された（E 類）の従属節の動詞を示す。

- ・逃げ回って、まじって、乗って、のぼって、ケガして、酔っ払って
- ・（器量を）表して、（肝心なところを）ぼかして、（ノートを）ひろげて、  
（詞を）書いて
- ・話がしたくて

以上、「V-テ、V-テモラウ」複文を、従属節の事態と主節の事態との関係に注目して考察した。先行研究で指摘されている使役の複文の従属節の事態は、テモラウの複文の従属節にも多く見られ、そして、これら 2 種類の複文にはともに主節で動作主体の意志動作の実現（早津（2015）での「意志動作のひきおこし」にあたるもの）について述べられる文が多いことが分かった。しかし、異なるのはテモラウの複文は、主節の事態において動作主体の意志動作の実現を表している例が、全用例 263 例中、261 例と圧倒的に多数を占めることである。それ以外の例は、動作主体の生理変化の実現を表す例が 1 例（従属節の事態は（D 類）「身体への関わり」）、動作主体の心理変化の実現を表す例が 1 例（従属節の事態は（D 類）「身体への関わり」）しかなく、いずれも非常に少ないと言える。

テモラウの複文は、主節のほぼ全てが動作主体の意志動作の実現について述べるものであるという点で使役の複文と大きく異なる。この相違点は、使役文とテモラウ文全体の性質の相違点から生じたものであると考えられる。すなわち、使役文には動作主体に働きかけて意志動作を実行させるような基本的な使役文もあるが、動作主体の意志を無視してその生理変化や心理変化の惹起を表すような周辺的な使役文もあり、文の種類が非常に豊富であると言える。それに対して、テモラウ文は基本的に主語も動作主体も意志性が読み込まれるという傾向があり、述語動詞もそのほとんどが意志動詞である。そのため、動作主体の意志を読み込まない、生理変化や心理変化を表すタイプの文は非常に少ない。

以上で述べた通り、「V-テ、V-テモラウ」複文は、そのほとんどが主節で動作主体の意志動作の実現について述べるものであり、主節のテモラウの意味が使役の意味に近くなると言えるのだが、本稿で考察した 263 例のうち、主節のテモラウの意味が受身に近くなる例が 1 例だけ観察された。

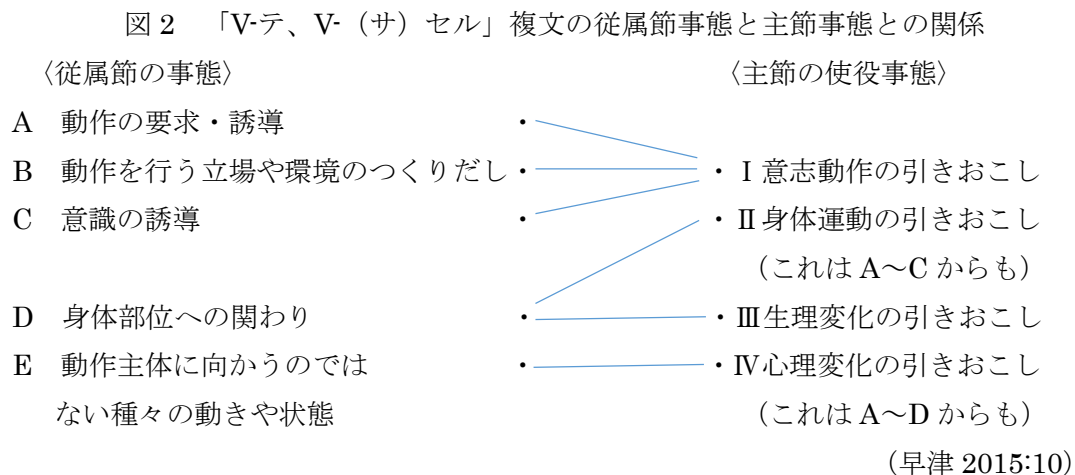
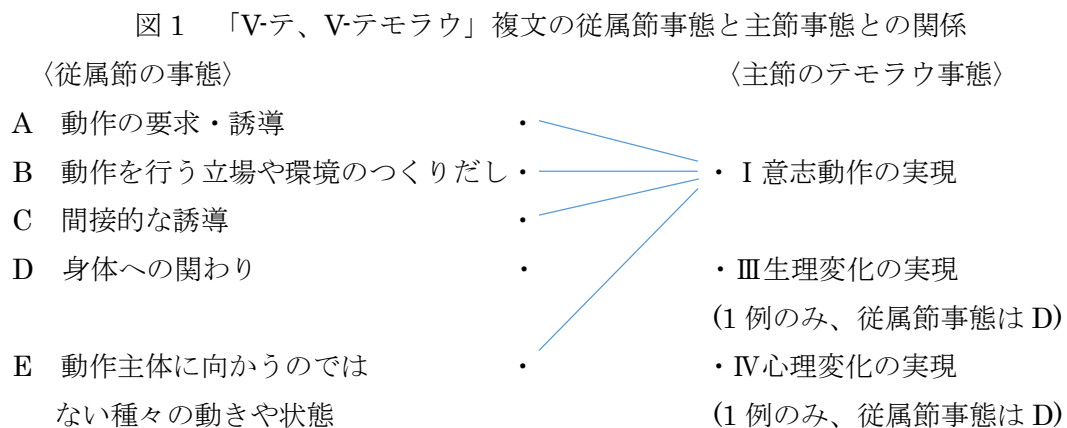
（20）早速申込んで採用してもらった。（ガラマサどん）

<sup>9</sup> 使役の複文の場合は、この「動作主に向かうのではない様々な動きや状態」を表す事態として、自動詞（「駆けだして」）、他動詞（「大声をだして」）、「シテイテ」の形をとったもの（「やさしい目をしていて」）、形容詞のテ形（「はげしくて」）が取り上げられている。

(20) の主節の「採用してもらった」の表す事態は「採用させた」ではなく、「採用された」であり、主節のテモラウの意味は使役的ではなく、受身的である。このような解釈が生じる原因は、動詞「採用する」にあると考えられる。つまり、「A が B を採用する」において、「採用する」という結果になるかどうかは動作対象の B にとって制御できず、動作主体（この場合は A）に働きかけても、普通「A に（自分を）採用させる」ということは考えにくいのである。このようなタイプの動詞には「合格する」という意味合いが含まれていると見なすことができる。ほかに「掲載する」という動詞もこのタイプに属すると思われる。例えば、「論文を投稿して、採用してもらった {≒採用された}」（作例）において、「掲載してもらった」の意味は受身に近くなると考えられる。しかしこのようなテモラウが受身解釈になる用例は本稿で考察した 263 例のうち 1 例しかなかった。そのため、「採用する、掲載する」などのような動詞については、用例を増やしてさらに考察する必要がある。

#### 4.2 「V-テ、V-テモラウ」複文と「V-テ、V-（サ）セル」複文の異同

4.1 節で述べた内容に基づいて、「V-テ、V-テモラウ」複文の従属節事態と主節事態との関係を図式化し、これを使役の複文の場合と比べると、次のようになる。



ここではあらためて「V-テ、V-テモラウ」複文と「V-テ、V-（サ）セル」複文の異同を整理しておく。

まず、テモラウの複文と使役の複文は、従属節と主節の関係性において、両者とも同様に＜原因—結果＞の関係にあると言える。つまり、従属節で動作主体への働きかけや動作主体に向かわない種々の動きや状態が述べられ、これが原因となって、主節で意志動作の実現や生理変化の実現、心理変化の実現がその結果として述べられる。つまり、この＜原因—結果＞の関係の本質は、＜働きかけ—意志動作の実現＞という関係が最も多く、基本的であると言える（後節で詳しく述べるが、この性質が、「V-テ、V-（ラ）レル」複文における＜受動的なこと—意志動作の実現＞の関係が一番多いという性質と大きく異なる）。さらに、2種の複文は従属節に用いられる動詞のほとんどが意志動詞であるという点においても似ている。テモラウの複文においては、(E類)に用いられる「ケガして」「話したくて」など6例の無意志動詞や形容詞を除けば、全用例 263 例中 257 例が意志動詞である。使役の複文に用いられる意志動詞の数については、早津（2015）でははっきり指摘されていないが、各分類で挙げられている動詞を見ると、そのほとんどが意志動詞であることが分かる。

以上の考察を通して、「V-テ、V-テモラウ」複文におけるテモラウの意味は使役の意味に近くなるということが分かる。

一方、これら2種類の複文の間には以下のような相違点もある。上の図1、図2からも分かるように、テモラウの複文と使役の複文における従属節と主節との関係は、全体的にみると、同じく＜働きかけ—意志動作・生理変化・心理変化の実現＞の関係であるが、主節の種類に大きな違いがある。使役の複文の主節で述べられるのは、意志動作の実現や生理変化の実現、心理変化の実現というように、様々である。それに対して、テモラウの複文の主節で述べられるのはもっぱら意志動作の実現である。生理変化の実現と心理変化の実現について述べられている例はそれぞれ1例のみである。

以上の4節で「V-テ、V-テモラウ」複文の性質を考察し、それを「V-テ、V-（サ）セル」複文と比較し、その間の異同について述べた。次の5節では、受身の複文「V-テ、V-（ラ）レル」を見ていく。

## 5. 「V-テ、V-（ラ）レル」複文の性質

受身の複文「V-テ、V-（ラ）レル」は、テモラウの複文「V-テ、V-テモラウ」と構造的に類似しているが、意味的、機能的な面では大きく異なると言える。先に結論をいうと、「V-テ、V-（ラ）レル」複文は、従属節中で、動作主体に向かわないタイプの様々な意志動作、そして無意志動作、状態が現れ、それが原因節として機能し、主節では結果節として、意志動作が実現することについて述べられている。つまり、「V-テ、V-（ラ）レル」複文における従属節と主節との関係は、「V-テ、V-テモラウ」複文に観察された＜働きかけ—意志動作の実現＞と異なる性質の＜原因—結果＞の関係にある（後に述べるが、＜受動的なこと—意志動作の実現＞の関係の文が最も多い）。それ以外に、従属節と主節が単純に時間的な継起

関係にある文や、従属節で述べられる事態が主節で述べられる事態の付帯状態となっている文もある。

### 5.1 従属節と主節との関係が原因—結果の関係

従属節と主節とが広義の＜原因—結果＞の関係をなす複文では、従属節で原因を表し、主節でその結果としての意志動作や無意志動作の実現を表している。このような文は全用例 284 例中 133 であり、用例数の面から見ると最も多い (47%)。原因を表す従属節中で表される事態は多岐にわたり、自動詞で表されるものや物対象或いは事対象の他動詞で表されるもの、動詞の受身形で表されるもの、形容詞で表されるものなど、一般化するのは難しい。従属節で述べられている原因の内容がこのように多岐にわたるのは、一般に事態の原因が何であるか、一つに特定することが難しいからである。つまり、意志動作や無意志動作、動きや状態、また周りの状況など様々な要素が原因になりうるからである。このような原因を表す事態の中には、意志動詞で表される例が 41 例、無意志動詞で表される例が 92 例あり、この 92 例の無意志動詞のうち、動詞の受身形が中止形となって従属節となる文が 47 例含まれている。そこで、以下では種類ごとに用例を挙げながら考察を進める。

- (21) まえ、パソコンのスイッチをいきなり切って、先生にしかられたでしょう。(空とぶじゅうたん、なぞの計画)
- (22) 人の金を勝手に引き出して、あとで厄介事に巻き込まれたりするのはかなわない。(森のなかの海)
- (23) だって、一番格好良い男より、二番目の方が、絶対にセクシーじゃん、などと答えて不思議がられていた。(日はまた熱血ポンちゃん)
- (24) 「久保には、やったのがばれて脅されたんだろう」(いつか、虹の向こうへ)
- (25) ロケットを打ち上げるために火薬を作ろうとして、薬屋で見破られて怒られたり、(森博嗣のミステリィ工作室)

(21) — (23) は、従属節における意志動詞で表される事態が原因となっており、主節で意志動作・無意志動作・心理変化の実現について述べられている文である。(21) は従属節で意志動詞「スイッチを切って」が用いられて原因を表し、主節で意志動作「しかる」の実現について述べている文である。(22) は従属節で意志動作「引き出して」が原因を表し、主節で無意志動作「巻き込む」の実現を表す文であり、(23) は従属節で意志動作「答えて」が原因を表し、主節で心理変化「不思議がる」の実現が表される文である。ただし、(22) のような主節で無意志動作の実現について述べている用例は数が少なく、全用例 284 例中で、たった 2 例のみである (もう 1 例は「(名を) 知られた」)。また、(23) のような主節で心理変化の実現について述べている文は全用例中 5 例のみである (「嫉まれる」「怒られる」等)。(24) は従属節で無意志動詞が用いられ、原因を表し、それに続く主節では、意志動作が実現されることについて述べている文である。(25) は (24) と同じく従属節で無意志動詞が表す事態が起因する例であるが、(25) の文の従属節は動詞の受身形が中止形とな

って複文の従属節となるものである。

## 5.2 従属節と主節との関係が時間的前後の関係

「V-テ、V-（ラ）レル」複文には、従属節と主節とが広義の＜原因—結果＞という関係をなす文だけでなく、＜時間的前後＞の関係をなす文もある。この種の複文の従属節の動詞も一般化することは難しい。その理由は、時間的前後関係にある二つの事態はその内容に制限がなく、どのような種類のものでも生起し得るからである。したがって、従属節の事態の動詞にも制限がなく、様々な動詞が用いられうると言える。

複文の従属節と主節とが時間的前後関係をなす複文の用例は全 284 用例中 90 例ある（32%）。このうち、従属節の述語動詞が意志動詞である文が 9 例あり、無意志動詞である文が 81 例ある。そして、これら 81 例の文はすべて動詞の受身形が中止形となって従属節となる文である。

(26) 降伏して、あとで、殺されるくらいなら、思う存分戦って死んだほうがましだと富士信忠は思っていたし、（火の巻）

(27) 行った先で全部精分吸い取られて最後にポンと捨てられる。（異界幻想）

(26) は従属節と主節が時間的前後関係をなす文であり、そして従属節中に意志動詞が用いられている文である。(27) は従属節で無意志動詞、且つ動詞の受身形が中止形となって連用節となる文である。このような複文の従属節とそれに続く主節の関係は、単純な時間的な前後関係を表している。これは (26) の「あとで」、(27) の「最後に」のような文中の要素からもしっかりと時間的前後の関係にあることが分かる。

## 5.3 従属節と主節との関係が付帯状態と主たる状態との関係

従属節と主節との関係が＜付帯状態—主たる状態＞の関係である複文は 284 用例中 61 例ある（21%）。その中で、従属節中に意志動詞が用いられる文が 8 例あり、無意志動詞が用いられる文が 53 例ある。そしてこの 53 例のうち 41 例の文が動詞の受身形が中止形となって従属節となる文である。

(28) 前身を隠して、アメリカ軍の情報部に雇われていた可能性もある。（哲学者の密室）

(29) その時、本部の先生は、今国家に尽さなければ、弾圧を受けて、信仰を禁じられるかも知れないと、苦しうに言葉をはさんだ。（神の微笑）

(30) 二人の兄、妹などに囲まれて、思いもよらないことを告げられたとき、（見慣れた景色が変わるとき）

(28) は従属節中において、意志動詞「隠す」が、主節事態の「雇われる」の付帯状態（「前身を隠して」）を表す例である。(29) は従属節で無意志動詞「（弾圧を）受けて」が用いられ、従属節が主節事態の「信仰を禁じられる」の様態という付帯状態を表している。(30) は従属節で無意志動詞「囲まれて」が用いられ、従属節が主節事態の「告げられる」ときの周りの状況という付帯状態を表している。

以上で見た従属節と主節との関係と、従属節の動詞タイプを表にまとめると、次のようになる。

表 1 「V-テ、V-（ラ）レル」における従属節と主節との関係と、従属節の動詞のタイプ

| 従属節と主節との関係<br>動詞のタイプ   | 原因—結果       | 時間的前後        | 付帯状態—<br>主たる状態 | 計            |
|------------------------|-------------|--------------|----------------|--------------|
| 無意志動詞<br>(受身形をとるものの割合) | 92<br>(51%) | 81<br>(100%) | 53<br>(77%)    | 226<br>(75%) |
| 意志動詞                   | 41          | 9            | 8              | 58           |
| 計                      | 133         | 90           | 61             | 284          |

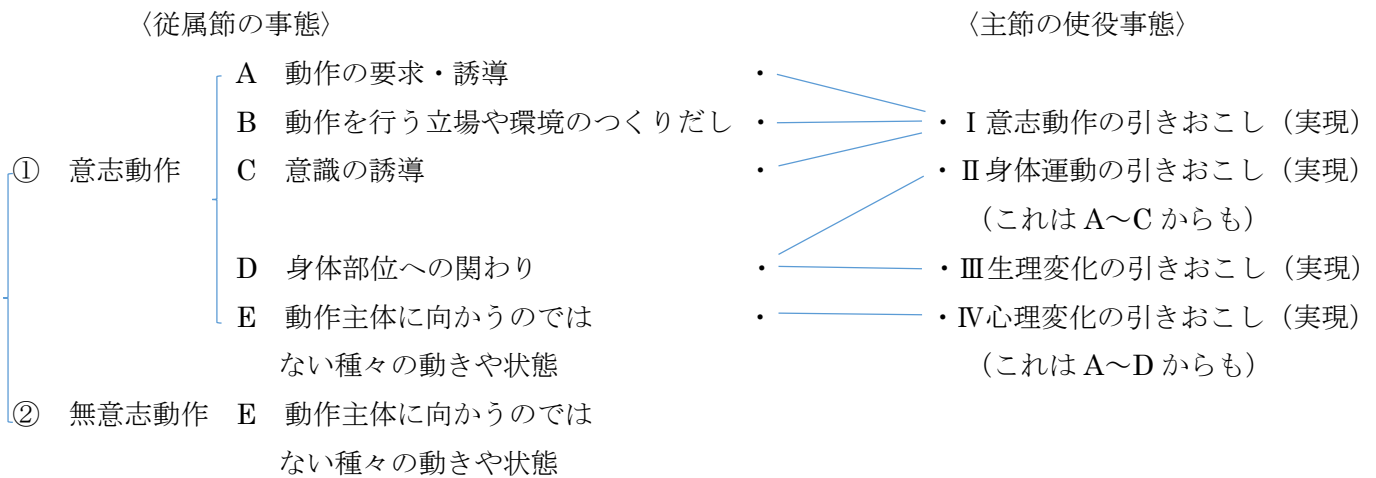
表 1 から分かるように、「V-テ、V-（ラ）レル」複文は、従属節で無意志動詞が多く用いられているという特徴がある（284 例中 226 例、約 8 割）。このように無意志動詞が多く用いられるのは、受身の複文の従属節で「原因」や「時間的に先行する事態」、「付帯状態」の事態を述べるのに、無意志動詞もそれらの事態を表現することができるからだと考えられる。

#### 6. 「V-テ、V-（サ）セル」・「V-テ、V-テモラウ」・「V-テ、V-（ラ）レル」の異同

4.2 節で示した図 1 と図 2 のように、早津（2015）で指摘されている使役の複文を参考にし、「V-テ、V-テモラウ」複文における従属節事態と主節事態との関係を確認した。その図を、従属節事態の動作が意志動作か無意志動作かという項目を加えて改めて示し、さらに同じ方法で「V-テ、V-（ラ）レル」複文の図と比べると、これら 3 種類の複文の間の異同が分かる。



図 2' 「V-テ、V-（サ）セル」複文の従属節事態と主節事態との関係



（この図 2' は、早津（2015）に基づいて、従属節の事態が意志動作か無意志動作かを加えたものである。）

図 1' 「V-テ、V-テモラウ」複文の従属節事態と主節事態との関係

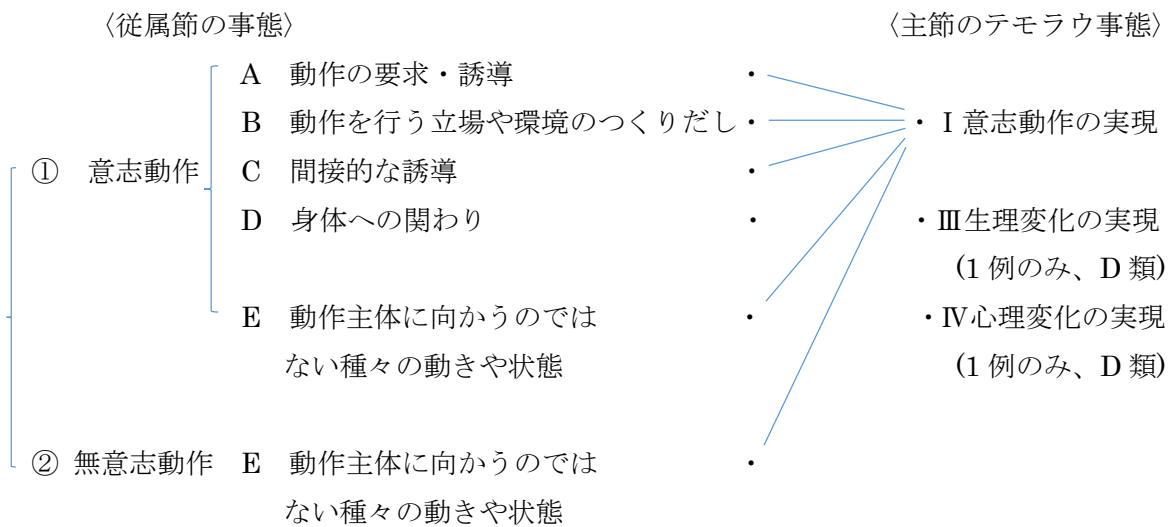
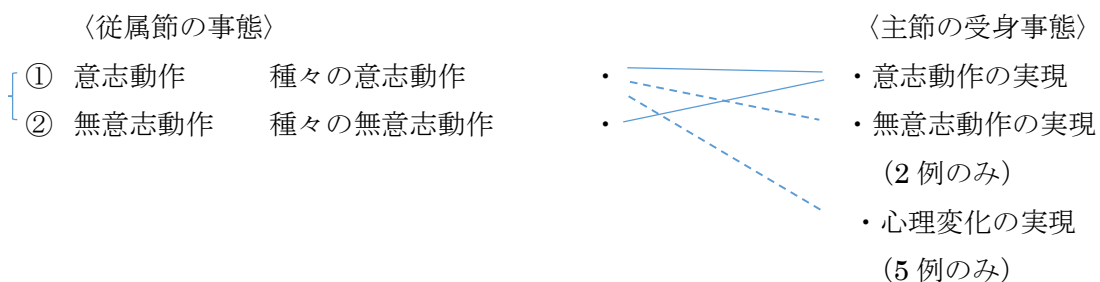


図 3 原因—結果の「V-テ、V-（ラ）レル」複文の従属節事態と主節事態との関係



「V-テ、V-テモラウ」複文を中心として、使役・テモラウ・受身の複文を比較すると、上記の図から分かるように、「V-テ、V-テモラウ」複文は、動詞が主節述語となるという構造をとる点や、複文の従属節と主節が広義の＜原因—結果＞の関係をなす種類の文があるという点で、「V-テ、V-（サ）セル」と「V-テ、V-（ラ）レル」とも類似している。しかし、次にあげる 3 点において、テモラウの複文は使役の複文と類似してはいるが、受身の複文とは大きく異なる。まず、従属節と主節との関係を見ると、テモラウの複文と使役の複文においては広義の＜原因—結果＞の関係をなすのに対し、受身の複文においては、広義の＜原因—結果＞の関係だけでなく、＜時間的前後＞の関係や＜付帯状態—主たる状態＞の関係を表す例が多く観察される。次に、従属節と主節における＜原因—結果＞の関係の本質が異なる。テモラウの複文と使役の複文における＜原因—結果＞の関係の本質は、＜働きかけ—意志動作の実現＞の関係であるが、受身の複文における従属節と主節との関係の本質は、＜受動的なこと—意志動作の実現＞の関係である。さらに、従属節の動詞のタイプという点においては、テモラウの複文と使役の複文における従属節の動詞のほとんどが意志動詞であるのに対し、受身の複文における従属節の動詞のほとんどが無意志動詞である。

## 7. まとめ

テモラウ文は、基本的に主語が動作主の動作から恩恵を享受するという意味を表す文であり、動作主の動作から恩恵を享受することを表すという点において、テモラウ文を用いることの必然性や独自性がある。一方、ヴォイスの観点からみると、テモラウ文は主語が動作主体でない文である点で使役文及び受身文と似た面があり、ある条件下では使役の意味に近くなり、また別の条件下では受身の意味に近くなる。本稿では、テモラウがテ形節に続く主節述語で用いられた文を取り上げ、このような構造をとる文におけるテモラウの意味が使役に近づくことを論じた。「父親に可愛がってもらった」のような単文においては、テモラウに働きかけの意味がない文も多く存在するが、「太郎は花子に頼んで、ご飯を作ってもらった」のように、「V-テ、V-テモラウ」の複文構造をとると、主節のテモラウは働きかけの意味を表しやすくなり、使役の意味に近くなる。このようなことから、テモラウの意味が使役に近くなるか受身に近くなるかは、文の構造、つまり複文において主節の述語となるか従属節の述語となるかということと無関係ではないと言える。しかし、文のこのような構造との関係はこれまでの研究では指摘されていなかった。

テモラウの意味が複文における成分によってどのようになるかということの解明を全体の目標として、本稿では「V-テ、V-テモラウ」構造の複文を取り上げて考察を行った。しかし、その他の複文構造をとる際の意味については、まだ考察の余地があり、この点については別稿にゆずることとする。

## 付記

本稿はカナダ日本語教育振興会 2019 年次大会（2019 年 8 月 7 日・ビクトリア大学）における発表内容に大幅な加筆修正を加えたものである。ご指導を賜った発表会場の先生方と有益なご意見を賜った査読者の方に感謝を申し上げる。

## 参考文献

- 李仙花（2014）「使役文とテモラウ文の働きかけに関する考察—〈叙述〉と〈実行〉のモードにおける解釈をめぐる—」『国語学研究』53, pp.30-43, 東北大学大学院文学研究科
- 李仙花（2015）「受身文とテモラウ文の意味的關係—「関与 (Inclusion)」と「排除 (Exclusion)」の観点から—」『国語学研究』54, pp.77-90, 東北大学大学院文学研究科
- 奥津敬一郎・徐昌華(1982) 「「～てもらう」とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に—」『日本語教育』46, pp.92-104, 日本語教育学会
- 高見健一（2000）「被害受身と「～に V してもらう」構文」『日本語学』19（5）, pp.215-223, 明治書院
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 仁田義雄（1991）「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと多動性』pp.31-58, くろしお出版
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐる」仁田義雄編『複文の研究（上）』pp.87-126, くろしお出版
- 早津恵美子（2008）「人名詞と動詞とのくみあわせ（試論）：連語のタイプとその体系」『語学研究所論集』13, pp.43-76, 東京外国語大学語学研究所
- 早津恵美子（2015）「日本語の使役文における使役主体から動作主体への働きかけの表現—従属節事態と主節の使役事態との関係—」『語学研究所論集』20, pp.1-13, 東京外国語大学語学研究所
- 益岡隆志（2001）「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30（5）, pp.26-32, 大修館書店
- 村上三寿（1986）「やりもらい構造の文」『教育国語』84, pp.2-43, むぎ書房
- 山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院

## 調査資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)